

平砂トンネル壁画 リニューアルプロジェクト —共同制作の楽しさと難しさ— (14011A)

おおわき さとし
大脇 聡史 (芸術専門学群 4年)



平砂トンネルは、平砂学生宿舎のすぐ上を東西に横切る市道の西側、市道と大学ループが立体交差する地点にあります。

以前の平砂トンネルの壁画は、8年前に「アート&デザインプロデュース」という活動のひとつとして、数名の芸術専門学群生により描かれたそうです。高さ2.5m、幅4m、全長が17mになる壁面に、筑波の四季をテーマにした絵が描かれていました。しかし、完成から歳月を経て汚れてしまっていることも相まって、私自身が入学した当初には既に、平砂トンネルについては「怖い」とか「暗い」という評判が多く聞かれました。そのような評判を耳にしたり、トンネルを通ったりするごとに、私は少しもどかしく感じ、それでも他力本願で「誰か描き直さないかな」などと思っていました。

今回この壁画を描き直すことになったのは、言いだしっぺは私ですが、行動力抜群のひとりの友人の後押し（というよりもほとんど先導）があったお陰です。彼女がいなければ、今回のこのプロジェクトは実行できませんでした。ということで、結局は他力本願だったわけですが、何はともあれ願望を実行に移すことができました。このような経緯で実行に移したので、壁画の下絵のアイデア出しから実際の制作まで、私とその友人を中心として、時々他の人の助けも借りながら活動を進めることになりました。

本制作に入った最初の段階で、下絵どおりに描くとひとつひとつのモチーフ（女の子や魚など）が大きくなり過ぎてしまうということに気づきました。下絵の段階でいくら同じ比率で縮小図を描いても、その時その時の画面の大きさに合わせてしまうので、結局は現場でバランスを見て描く他なかったのです。

これは、意外な発見でした。それでも、下絵の段階である程度の絵の流れは出来ていたので、後は現場に合わせて、配置を変えたり、モチーフを追加したりして調整を図りました。

ひとつの絵を複数人で共同制作することには楽しさもありましたが、難しい部分もありました。現場でも主要な線描きはふたりで行ったのですが、そうするとお互いに予想しない形が出てくることもしばしばで、それが気に入ることもあれば、どうしても気に入らなくて描き直してもらったり、時にはもう一方が手を加えたりするということもありました。お互いの予想を超える形は、良し悪しはありますが、表現の幅を広げます。それとは逆に、指摘を恐れたり気を遣ったりして萎縮してしまうことになれば、表現の幅は狭まってしまいます。この点には常に気をつけながら制作しなければなりません。

制作中もトンネルの片側は常に通れるようにしていたので、通行する人が時折声を掛けてくれました。声を掛けてくれるまではいかなくとも、複数人で通る時には「明るくなったね」とか「かわいいね」という会話が聞こえてくることがありました。制作者がいる前なので、当然出てくる声に偏りがあることはわかっていましたが、それでも、トンネルを使う人が喜んでくれている様子が見られると嬉しい気持ちになりました。

新しい壁画が無事完成して、しばらく時間が経って、反省することもないわけではありませんが、印象は明るくなったと思うのでとりあえずの目標は達成です。時間もお金もかかりましたが、結果としては制作して良かったと思っています。力を貸してくれた友人たちには、本当に感謝しています。



制作中の様子



完成したトンネル壁画。大きな鳥が見守っています